日本における精神病学用語の変遷

岡田靖雄

現在日本精神神経学会は第四次の統一用語集の検討をすすめているが、その作業のなかで、用語の歴史的変遷の調査はされていないようである。だが、精神病学用語（ヨーロッパ系用語の訳語）の変遷はいちじるしいものがある。たとえば、わたしたちがさきによんだ、榊俶教授の最初の精神病学講義の筆記録では、"Bewusstsein"が「神識」、"Hallucination"が「妄想」、"Dementia"が「健忘」、「失神」と訳されている（岡田ほか、榊俶教授精神病学講義記録〔高嶺三吉〕――開講一〇〇年をまえに――。精神医学、第二七巻第一二号、一八八五年）。

そして、大鳥蘭三郎先生が「我が医学に使用せらるる解剖学語彙の変遷」（中外医事新報、第一一八九―一一九三号、一九三二―三三年、『半生の思い出』に再録）をまとめられていることにならって、精神病学用語の変遷をまとめることをおもいたった。このことには、先人たちがわが国の伝統医学（漢方医学）の知識をヨーロッパ医学の用語といかに調和させていったかを跡づける、といった意義もある。

ところで、解剖学用語のばあいとちがって、精神病学用語の変遷をみていくうえには、いくつかの困難がある。

一　周知のように、現在ひろく通用している精神医学体系の基礎は、一九世紀末から二〇世紀はじめにかけてエーミール・クレペリンによっておかれたもので、それまでに精神医学の概念は（したがって、その用語も）ヨーロッパの医学においても、おおきな変遷をたどっていた。また同一の用語も国によってその意味がかなりことなる（たとえば、ドイツ精神医学では意識障害の一形態をさす「アメンチア」は、イギリス語では精神遅滞の軽度のものをさしている）。

二　他方、「癲」、「癇」などの用語をみても、その内容はかなりおおきく変遷しており、漢方医学のほうの用語の変遷にも注意する必要がある。

三　精神病学用語の変遷をたどるには、内科学中の神経病学用語および心理学用語もたどる必要がある。

四　その本に原語がつけられていないばあい、原語を推

測しがたいことがある。典拠とした本があげられていても、わが国ではそれがみられないことがおおい。

まず主として『呉氏医聖堂叢書』（呉秀三、一九二三年）所載のものによって、わが国の伝統医学の用語で明治以降の精神病学用語としてつかわれたものをひろうと、健忘、癲癇、癲狂、痴獣、錯乱、心気、欝症、昏迷、昏睡、嗜眠、臓躁などがある。またもともと仏教用語に、妄想、妄覚があり、夢精をさす俗語として「マウザウ」の語がつかわれていた。

しらべたものは、1、宇田川玄随訳・藤井方亭増訳・宇田川玄真校註『増補重訂内科撰要』（一七九三―一八一〇年）2、桑田衡平訳述『増訂内科摘要』（一八七五年）、3、神戸文哉訳『精神病約説』（一八七六年）、4、栗原順庵『洋漢病名一覧』（一八七八年）、5、エルメレンス『原病学各論』（一八七九年）、6、デーニッツ『断訟医学』（一八七九年）、7、ローレッツ講述「断訟医学」（『医事新報』所載および林笈筆記録、このうち「裁判上精神学」はおそらく一八八〇年）、8、三宅秀『病理各論』（一八八一年）、9、片山國嘉・江口襄『裁判医学提綱』（一八八二年）、10、落合泰蔵『漢洋病名対照録』（一八八三年）、11、榊俶精神病学講義（高嶺三吉筆記録、一八八六年―八七年）、12、江口襄『増補精神病学』（一八九〇年）、13、呉秀三『呉氏精神病学集要』（一八九四、九五年）である。用語の変遷をたどるには、個別論文もみる必要がある（充分検討できていないが、江口のいくつかの論文が重要である）が、今回はいわば結節点として、上記のように主として単行本をとりあげた。また金子準二『日本精神病学書史』（一九六五年）、『日本精神病学書史　江戸前篇・江戸篇』（一九六五年）を参照した。

これらによって、いくつかの用語の変遷をたどってみたい。ここでついでにいっておけば、今回直接にみはしなかったが、精神疾患の総称として「精神病」の用語をはじめてもちいたのは緒方洪庵訳『扶氏経験遺訓』（一八五七年）であるらしい。

（精神科医療史研究会）